

も尾張徳川家及神田男爵家に各一部を遺存す、三本共に同一板本にしてたゞ金剛山本には脱葉を補寫挿入せる部分あり。此部分は兩家本に脱落せず神田本には養安院の記印あり徳川家本と共に文祿慶長役の分捕本なるべし。

東京帝國大學にては本書を明治三十七年神田本を底本として刊行せるも此刊本訂正を要すべき點甚だ多し。坪井先生の手許には訂正再板の稿既に成るものあるも未だ改板に至らず。日本續大藏經には大學刊本の句讀の誤十數個處を坪井先生が訂正せられしものを收めたり。本書の良本は改正板の出づるを待つの外なし。(大正五、六、八)

## セリヌンテの石切場の遺跡

文學士 濱田耕作

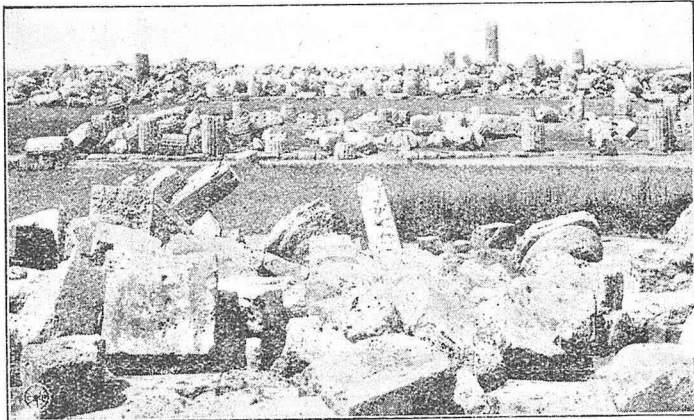
希臘時代の大建築の一群の大風に吹き倒された

るが如き凄しきセリヌンテ (Selinunte) の遺跡に追懷の情を恣にしたる余は、グリンフィールド夫妻と其の夜をカステルベトラノ (Castelvetrano) の云ふシチリヤ島のいと小さき田舎町に明しぬ、燭光暗くして讀書の便り無く、惡虫に惱まされては安眠成り難うして五月十四日 (大正三年) の曉は早く明け放れぬ、六時半我等は馬車を曉風に驅つて西南五六哩カムボello (Campobello) の附近なる古へセリヌンテの石切場に向ふ、シチリヤ探勝の客の多からざるうちにも、セリヌンテの遺跡を訪ふ人はいと少し、況して此の石切場の遺跡に足を向くるものは極めて罕なるを、同じ志の友を得て此の地に遊ぶことを得たるは、何の喜か之に勝る可き。

海道を進むこと一哩弱カサ、インガム (Cassa

Ingham) に到れば、早くも路傍にセリヌンテに連び行かんとせしを、其の儘中道に打ち捨てたる柱

のドラム（柱身の一部）の残れ  
 るを見る、長さ一丈にも餘り、  
 直徑は九尺に及ぶ巨石なり、さ  
 ては石切場も遠からずと思ふ  
 ちに、やがて我等は Rocchedi  
 Cusa 或は Cave di Campobe-  
 lio と稱せらるゝ石切場の前に  
 著きぬ、石切場とて高き山には  
 あらず、孔多く粗き褐色の凝灰  
 岩（Tufa）の如き石塊の露出した  
 る小高き地面にして、丘陵とも  
 云ひ難き程なり、されば一見し  
 て何等の奇も無く何等の殊なる  
 を認めざれど、其の北邊の柵に  
 倚りて進み行くうちに、我が眼  
 下には石を切りたる跡の凹凸極  
 り無く、しかも柱身ドラムの材料とし



て切り取りたる石ドラムの、打ち倒  
 れて少しく運び去られしもの  
 あり、或は切り取らんとして  
 セ 其工事半ばなるあり、其の工  
 リ程の是より始まりて彼に移れ  
 ヌる跡歴然として一の階段をな  
 ンす、降つて遺柱の下に到れば  
 テ、高さは我等身長の二倍にも  
 東餘り、其の周回は三人の手を  
 丘連つとも未だ及ばず、扱て石  
 のを切るの法先づ所要の直徑の  
 三圓を石上に劃し、之より漸次  
 寺切り下げて一丈内外の深さに  
 址至る、切斷線の幅三尺可、人  
 體の其間に入出して作業に硬  
 ならしむる爲めなる可し、然  
 る後ち底部を切り放ちて之を

搬出し去るなり、其の柱面のフルーチングは固より建築の略ぼ完成したる後に加工せらるゝを當時の常としたれば、此の石切場の柱材に未だ之を認めざるは惟しむを須るす。(セヂエスタの寺院は其の外觀略ぼ完ふして柱面のフルーチングを缺く、是れ當時建築の工程を示す好例なり)。

二

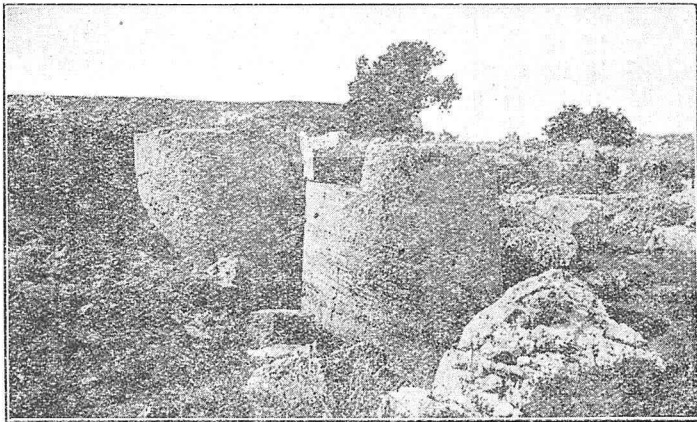
されどセリヌンテの石切場が吾人の興趣を惹く所以のものは、單り其の希臘時代の石山たる故のみにあらず、如何なれば此等各種の工程を示せる遺柱が石切場に若しくはセリヌンテ路上に遺棄せられたるか、其の理由の特に興味あるものあればなり、乞ふ吾人をして少しくセリヌンテの歴史を説かしむる所あれ、セリヌンテ、希臘名はセリヌス記元前六二八年メガラ、ヒュブレア(Megara Hyblaea)よる植民する所にして、シチリヤ島に於ける希臘人の植民地中最も西邊に位す、(セリヌスSé-

inousの名は此の地の附近に今なほ多く生ずるもの、<sup>三</sup>mon即ち野生のセラリー(ニツ葉の類)より來ると云ふ)常に北隣の都市セヂエスタ(Segesta)と相鬩ぎしが、四〇九年セヂエスタは援をカルタゴに求む、シエフエツト、シンニバル(Shophet Hannib<sup>トリス</sup>le)六十の三段櫓の兵船、千五百の雜船に四千の騎兵及び各種の軍用器械を載せて、先づシチリヤ島の西端なるリ、バイオン(Lilybaion)に向ひ、それよりモチャ(Motya)に上陸し、直ちにセリヌンテを衝く、時にセリヌンテの市民は久しく富盛に馴れて兵備を修めず、たゞ巨大なる神殿の建築に急なりしかば、固よりハンニバルの襲撃に堪ふる能はず、シラクサ及びアクラガスの援兵亦た來ること遅くして、九日の劇戦の後守を失ひ、市民多くは屠殺せられ幼若婦女は奴隸とせられぬ、(Diodoros)の史に詳なり、今ま他書より之を引用す)これ實にセリヌンテの悲惨なる運命の緒にして、

此後再び往年の隆盛を見る能はず第一ポエニ戦争の際全く滅亡して後長く今日に至る迄荒涼なる遺跡と化し去りぬ。  
 (Strabo 已に之を絶滅せる市街と記したるを以て見るも、羅馬人の之に據るもの無かりしを證す可し)

三

ハンニバルのセリヌンテを攻略せる時セリヌンテ人の建立中なりし巨大なる神殿は、蓋しセリヌンテの東丘に今なほ遺存するEFG三社の一なるG社なる可し、其の宏大なる規模はアクラガス(即チルヂエンチ)なるゼウスの神殿



第一卷 雜纂 セリヌンテの石切場の遺跡

セリヌンテの石切場の遺跡に相若き、長さ三百七十一尺幅百七十七尺の Pseudo-dipteros octostylus (變様二重列柱前後八柱式) の建築にしてアポロ神の爲めに造らる、其の倒壊散亂せる遺跡には猶ほ二三の巨柱の聳立せるあり、而かも遺柱の多數は未だフルーチングを有せず、未完成の儘に今日に残れるは、かのカルタゴ人の急襲によりて工事の中止せられしを推察するに足る、而かも其の柱の直徑底部に於いて十一尺許り、恰もカムポペルロの石切場の柱材と相一致す、之を在セリヌンテの他の建築のそれと比較するに、皆な遙かに細小にして之と比す可

くもあらざるなり、即ち左の如し。

(柱直徑底部) (同頭部)

西		東		丘	
A	B	C	D	E	F
寺	寺	寺	寺	寺	寺
四尺四分一	一尺半(?)	六尺	五尺	七尺	五尺四分一
三尺半	一尺(?)	五尺	三尺四分三	六尺	四尺
			六尺半乃至八尺		

思ふにハンニバルのモテヤに上陸して東進するやカムポペルロの石切場は、却つて其の衝に近きを以て、石工は急を聞いて遽に工事を中止し、セリステ市に退却せしなる可く、G社の石材の搬出せられて中道にありしものは之を其地に殘し、石切場に切りかけたりし柱材は、亦た其の剎那の工程のまゝ之を棄て、顧ざりしや言を俟たず、今日吾人が目前に残れるもの一として紀元前四〇九年

春某月某日某時の現狀を髣髴せしむるに非ざるはなし、考古學上の遺跡多しと雖も斯の如く歴然として當時の光景を吾人に傳ふるもの其の例蓋し多からざるなり。

吾友ボーウエン少佐 (John Bowen) は英國アスクの人、未だ歐洲戰亂の起らざりし大正二年の夏、共にソールスベリーの野にウエールス考古學會の遠足會に參じて、其の母堂と共に日夕、食卓をデバイゼスの旅館に同ふしだりき、其年の秋余は招かれてアスクに君の家に宿りしことありき、當時君は豫備中尉にして、余に示すに軍用行李を以てし、一旦緩急あらば之を携へて戰場に赴く可きを語られしが、思はざりき今や君は白佛の戰場に暴露すること二年、三び負傷してなほ戦友を捨てず、留まりて戦陣にあり、昨年一月十一日余に寄するに、長文の書を以てしたりしが、其のうち現戦役の爲め、白佛國境に於ける製造場の荒廢に歸

し、作業の一時に中止せられし光景を叙し、轉たセリヌンテ石切場のそれを想起せしむるの記事あり。知新温古の材料之に過ぎずと思へば、原文のまゝ左に之を抄録せん。

“...In this country it is curious to see very large factories of steel or Paper or other articles quite silent and empty. They all seem to have been left at an instant when just in the middle of work, a piece of steel on a lathe half turned, pieces of fibre for ropes drying on a loom. In our archaeological researches, we hear of similar incidents being found in excavated Roman or British dwellings and no doubts, there is same reason for all, that war has suddenly descended on the place and things are left at an instant's notice.”

と石切場と製紙場或は鐵工所の差こそあれ、紀元前四百九年と紀元後一千九百十四年の時こそ隔たれ、同じく戦亂に會して工場の作業一時に中止して放棄せられし光景其の軌を一にせる興深きよ、我ばポーウエン少佐に返書して、我が見たるセリヌンテの石切場を叙し、氏が此の兵馬倥傯の間に際してなほ考古學的の觀察に耽るを謝したりき。

## 五

セリヌンテの西丘には相並べる神祠の北端に小さき城塞の遺跡あり、かのシラクサの古城には比す可くもあらぬ規模なれど、同じく希臘時代の軍事的建築として面白し、こは紀元前四〇七年ヘルモクラテス(Hemokrates)の修造する所なりといふ、戦亂の後を承けて要塞の築造に急なりしことは、其の城壁の隨所に寺院の柱頭或は三溝束トリグリップなどを捉り來りて使用せるを以て之を窺ふ可し、實にフリーマン氏が其の「シチリヤ史」の初めに言へる

が如く、「シチリヤは是れ各國民各國語更に亦た各宗教の集會所なり、戰場なり、東人と西人との争闘場なり、而かも奇なるは東人は西方を略して西方より東進してシチリヤに入る」と、セリヌンテの石切場は即ち此の異様の民族の争闘の歴史を語るものにして、而かもハンニバルは東方より來りて西方を略し、終に再び東進せる東人なりき、我れシチリヤの遺跡を巡遊して未だセリヌンテと其の石切場ほど歴史の興味深きものあるを知らざるなり。

セリヌンテの石切場を訪ひし日、我等は引き返してカステルベトラノより汽車に搭じて、セリヌンテの宿敵たりしセチエスタの古寺を訪ひぬ。

(主要參考書)

1. Koldeway-Puchstein—Die griech. Tempeln Unteritalien u. Siciliens.
1. Freeman—History of Sicily.

1. Pernot-Chippiez—Histoire de l'art antique. VII.
  1. Baedeker—Southern Italy & Sicily.
  1. Rocco-Mancini—Circanti, Segesta e Selinunte
- 附記、本篇は器に史學研究會に於いて講演せるシチリヤ旅行談の一節を補訂せるものに係る。